

Art 048 Campus

*Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design*



Interview with OKAMOTO Rei

岡本 玲さん
巻頭インタビュー

チャレンジ!



写真:	photography:
細野 瑠衣	HOSONO Rui
インタビュアー:	interviewer:
吉田 飛鳥	YOSHIDA Asuka
吉野 萌	YOSHINO Moe
本森 奏音	MOTOMORI Kanon
角田 司	TSUNODA Tsukasa
野津 芽生	NOTSU Mei
瀧澤 知香	TAKIZAWA Chika
岡本 結	OKAMOTO Yui
堀内 壘	HORIUCHI Rui



Q 日藝にはどんな思い出がありますか？

先生が愚痴も含めて色々な話を聞いてくださったからがんばれた4年間でした。お仕事との両立でギリギリの生活を送っていて、2年生の終わりにくらのときに大谷尚子先生に「自主退学を考えてます。どんなに頑張っても授業に出席できないしテストも受けられない。どうしたら私は卒業できますか」って半分泣きながら相談したんです。そしたら大谷先生が、こういう授業の取り方もあるとか、課題を出してくれたりとか、親身になって応えてくれたんです。齊藤裕人先生に泣きついたこともありますね(笑)。優しい言葉だけではなく、厳しいこともたくさん言われました。でも朝ドラに出演が決まった時にはすごく喜んでくださったのを覚えています。映画学科の事務室に行くと、先生の机の棚に学生が出演しているDVDや雑誌が置いてあって、『資料として置いてある』って先生たちは仰ってましたが、学生のことを気にかけてくれてるんだなと感じます。

日藝は上京して初めて心を通わせられる友だちができた場所で、現在の仕事に通じるいちばん初めの土台だったり、好きなものを話せる仲間に出会うことができました。

自分が好きなことで生きていくためには、徹底的に情熱を注がないと好きなものはこっちを振り向いてくれない、ということを私は日藝で感じました。何か好きなものをとことん追いかけている



人たち、突き詰めてる人たちが日藝には沢山いて、だからフワッとした「好き」だけでは話も通じなかったりする。芸能活動をしながら通学してましたが、本当に焦ってましたね。この世界に少しでもみんなより足を踏み入れてるつもりではいるけど、熱い思いとか、好きな気持ちや知識は全然足りてない。とにかく競争心を掻き立てられました。

Q 大学生らしいことはしましたか？

大学の近所に住んでいた友達の家にみんなで行ったり、終電を逃して駅前のカラオケで朝まで過ごすとか。「お志ど里」で先生と定食を食べたりもしました。

Q 印象に残っている授業などがありますか？

映画学科の授業はもちろんどれも面白くて興味があつたんですけど、放送学科の放送のマーケティングを学ぶ授業はよく覚えています。普段お仕事をしている世界の裏側を学んでいる、みたいな(笑)。一番怒られたのは日舞の先生です。演技コースの後輩に『岡本さんって日舞の授業で先生とやりあつたって有名ですよ』って言われて(笑)。卒業してからも、その先生の指導を受けたり、いまでも交流があつてお世話になっています。

Q お仕事との両立でとても大変な学生生活だったと思いますが、心がけていたことなどがありますか。

自主退学しないと決めてからは、どうやったら自分のしたいことと両立させながらいかに4年で卒業できるか、その手段を見つけることを考えてトライアンドエラーはすごいしてました。



Interview with OKAMOTO Rei.....

日藝生に大事にして欲しいと思うことはありますか？

チャレンジ！ 言葉で言うとは簡単だけど、実際にチャレンジできるかできないかは大きいと思います。例えばいろんな学科の学生が入り乱れたイベントを企画して実際にやったり。トライアンドエラーって若ければ若いほど、早ければ早い方がいいと思います。コロナ禍でオンライン授業も多いかと思いますが、うまく活用すれば自分のやりたい活動をしながら授業もきちんと受けられますしね。

最後に在校生にメッセージをお願いします。

ぼろぼろになって気がすむまで自分が選んだことに対して挑戦してみるのがいんじゃないかなって私は思います。でも、だからといってガチガチに頭を硬くするのではなくて、柔軟に。日藝はいろいろなことにすごく寛容で柔軟な学校だになって思うので、どんどん自分が面白そうとか楽しいとか好きって感じるものをインプットもアウトウットもしてってください。日藝で出会った友だちも誇れるもののひとつだし、卒業したら絶対いい思い出になるからがんばってください！

(構成：瀧澤)



在校生の皆さんへ
自分の心に正直に
思いっきり楽しんでください！

2021.
12.3

岡本 玲

Profile 岡本 玲 (おかもと・れい)

1991年6月18日生まれ 和歌山出身。2014年日本大学芸術学部映画学科演技コース卒業。『nicola』読者モデルオーディションでグランプリを獲得し芸能界入り。その後女優として、ドラマ「生徒諸君!」を皮切りに映画・ドラマ・バラエティー・舞台・TVCM等に多数出演。在学中に「フリーター、家を買う。」「最高の人生の終わり方〜エンディングプランナー〜」NHK連続テレビ小説「純と愛」、卒業後「わろてんか」に出演。更に注目を集める。2022年公開予定映画「茶飲友達」では主演を務める。また5月には出演舞台『ロビー・ヒーロー』（演出：桑原裕子／新国立劇場ほか）が上演を控える。

〇〇ついて行ってみた

日藝生として過ごしていても、自分の学科以外のことって案外知らない。どんな教室があるのか、そこをどうやって使っているのか紹介してもらいました。



5



4



1



8



6



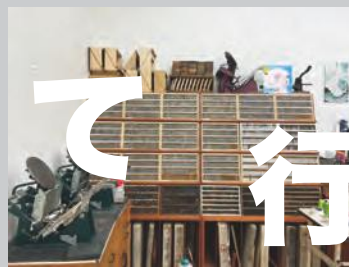
2



3



3



6



6



7



3



2

突然ですが、
他学科生が
知らない場所、
ついて行って
いいですか？



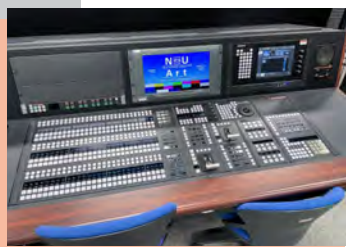
安住仁吾技術員: テレビスタジオは主に、テレビ制作専攻や、映像技術専攻の授業で使用する場所です。

放送学科では、できる限り実際の現場と同じ機材を揃えるようにしており、学生の皆さんが現場と同じ環境で実習できるよう日々整備しています。最近ではBS4k放送(従来の4倍の高精細放送)が始まりましたが、今あるスタジオは、それに対応している機材を完備しており、地方のテレビ局と比べても負けない設備です。

安住技術員: また、出演者やカメラマンがいるスタジオフロアの他に、調整室が付随するのもテレビスタジオの大きな特徴です。

調整室の各席には、様々な役割を持ったスタッフが座り番組制作を進めていきます。

例えば、映像を切り替えるスイッチャーというスタッフは、全ての映像素材が映し出されるモニターの前に座ります。台本には切り替えのタイミングなどが書いてあり、ディレクターと相談しながら、またインカムでスタジオにいるカメラマンと連携をとりながら、タイミングを合わせて映像を切り替えていきます。



3 美術学科

飯田竜太先生: 美術学科は7階が絵画、3階が版画、地下1階が彫刻と専攻によってフロアが分かれています。彫刻は大きな機械を使用するので音や粉塵の問題から地下に、版画は腐食銅版の制作作業の過程で廃液を外のタンクに流す作業があります。そのため3階フロアの一番端に建てられました。また、天井高を上げるために3階フロアでは唯一の最上階となっています。絵画は光が重要なので、自然光を取り入れられるように天窓を設置するため7階になりました。

飯田先生: 木、鉄、石、粘土の4つの素材を彫刻専攻では扱っているのですが、それぞれのアトリエが用意されています。使う機材も素材によって違いがあって、例えば鉄の場合は溶接は電気でプラズマを起こすアーク溶接機を使用して行い、溶断はガスで起こした火を使います。

飯田先生: ひとえに版画と言っても版画の基本技法である「木版画、リトグラフ(石版画)、銅版画」を3階のフロアに集約し、1年生から大学院生までが一緒に空間で制作しています。木版画では大きな木を掘り刷るスペース、リトグラフや銅版画ではプレス機があります。また、腐食銅版を制作するにあたり腐食室やアクアンチント室など特殊な技法を行うための作業スペースも完備されています。各々の制作技法に合わせた設備が整っており、様々な作業が見渡せる環境となっています。



川田えりさん: 廊下に参考作品があったと思うんですが、あれらはみんなこの工房で作ったものです。基本的には木工系の機械を置いています。溶接機など金工系の機械もあります。様々なサイズの機械がありますが、大型のものはパネルソーとスライドソー、万能木工機の3つがあります。それぞれ用途が異なっていて、パネルソーは直線にしか切れないんですがスライドソーは切る角度や刃物自体の角度も変えて切ることができます。この2つはベニヤ板のようなすでに板状になったものを切る機械ですが、万能木工機は伐採した無垢の木材を直角に削って一定の厚みに製材するための機械です。

川田さん: ここは工房内にある塗装室※1です。普段は鍵がかかっているのですがあまり見られない場所になっています。大きな箱の前にあるテーブルに作品を乗せて塗装をします。塗装室自体が密閉できるようになっているので、後ろから前に風が吹くことで作品に付着しなかった塗料を撒き散らすことなく回収できる仕組みになっています。



南香織先生: 中ホールにはここでしか使うことのできない様々な機材や舞台の機構があり、普段は通常の実習で使っているほか、演劇学科の総合実習という授業では実際にお客様を招いて上演するなど劇場としても稼働しています。



南先生: 今日演劇学科の有志が中ホール内の機材メンテナンスを行っている関係で舞台奥の倉庫も開けているので特に広く感じます。幕が下りると一回り小さくなるんですが、横幅は8間(約15m)、奥行きは6間(約11m)あります。

南先生: 舞台袖には音響の機材があります。スピーカーやマイクをここに繋いで、客席にある操作卓で音量などを調整できるようになっています。隣にあるのが舞台監督架といって、舞台監督の方が常駐して事故がないかモニターなどでチェックします。

奥山緑先生: この場所自体はパネルが立ったり、客席から見えないようにする幕が下りたりするので見えなくなる場所ですね。



4 演劇学科



音楽学科

駒澤大介先生: 音楽スタジオはレコーディング専用の機材が揃っていて、放送学科さんや映画学科さんとは違った、音楽専用のスタジオです。隣のスペースにある楽器やマイクを使って録音したあと、最終的には音を流す媒体に合わせて調整しています。

脇岡洋平先生: レッスン室には学生用と講師用で2台のグランドピアノを設置しています。グランドピアノは大きさで分けられているんですが、これは一番サイズの大きいもので、コンサートホールで使用するものです。1台4桁ほどの値段ということもあり他の音楽大学でもレッスン室にこのサイズのものがあるところはそうないと思います。

他にもチェンバロやポジティブオルガンを置いているレッスン室もあります。

脇岡先生: 小ホールは声楽、ピアノ、管弦楽の3つの演奏系コースの試験で利用しています。

近辺紗樹さん: 音楽学科主催の演奏会や入学式、入学試験もここで行っていますね。このホールはステージの形も音が響くように作られていて、楽器を演奏して鑑賞するのに最適な形になっています。



谷村順一先生: ここは西棟5階にあるゼミ室5です。文芸学科にはゼミナールを行うための教室が5つあるんですが、そのうちのひとつです。見ていただければわかる通り、ここは畳貼りの部屋で、俳句や短歌を扱うゼミやいくつかのサークルが使用しています。もしかしら文芸学科の学生でも畳の部屋があることを知らない人がいるかもしれないですね。

谷村先生: 文芸資料室は言わばより文芸学科に特化した図書館で、文芸作品から漫画、絵本までさまざまな資料を取り揃えています。貸出カードを作ればどの学科の学生でも借りることができますし、読みたい本の購入希望申請もできます。

あまり知られていないと思うので、他学科生も利用してみてもいいですね。

奥の扉は集密書架と言って、明治大正期に発行された雑誌の複製版など今では入手困難になっているバックナンバーや出版社ごとの辞典などの蔵書が保管されている場所です。



映画学科

穴澤勇樹先生: ここは東棟1階の撮影スタジオです。ここに建っているのは部屋のセットで今は何も置いていませんが、実際に撮影する時には家具や小道具を配置して、作り込みを行い世界観を作ります。撮影しやすいように壁も外すことができます。

上にあるキャットウォークでは照明ボタンを利用し、下におろしてライトを吊ったり位置を調整したりします。撮影スタジオのボタンは電動で細かく調節できるので誰でも扱いやすい作りになっています。

穴澤先生: ここは主に撮影録音コースの録音専攻の学生が使う録音スタジオ(ダビングステージ)です。このスタジオのメインの作業は、スクリーンに画を上映しながらセリフ・効果音・音楽・環境音などをそれぞれのフェーダーに立ち上げてミックスするDB(ダビング)です。このステージは劇場と同じ環境なので大音量の中で音の演出ができます。国内はもとより世界中でこのコンソールと同じものが使われ、有名な作品が多数制作されています。



写真学科



佐藤英裕先生: 大スタジオは主に広告写真やポートレートの授業、それから2年生の実習の基礎の部分で使っています。ひとクラスに20~25人くらいいるので、それくらいの規模感での授業です。

内藤一樹さん: 横にあるラックにはライトやデジタルカメラがしまっています。モノによっては車を買ってしまう値段の、プロが使っているような性能の良いデジタルカメラですね。

佐藤先生: 入り口から入ってすぐのキッチンが料理の撮影のときに美味しそうに見せるための湯気の演出にお湯を沸かすときなどで使います。なぜか一緒に置いてある石膏像はポートレート撮影のときに光の当たり方を調整するために使っているものですね。

佐藤先生: ここは大スタジオの向かいにある小スタジオです。ひとつこだわりがあって、北側の天空光を取り入れられる大きな窓を作っています。写真撮影の技術が登場した当初は自然光で写真を撮らないといけなかった時代でした。そのときのように自然光で写真を撮れるようにしているんです。



文芸学科

7



日藝100周年 ニッポン放送

日藝100周年の2021年。産官学連携プロジェクトのひとつとして
ニッポン放送と日藝がコラボを行なった。11月5日に放送された
「立川志らくのオールナイトニッポンGOLD」、「黒島結菜のオールナ
イトニッポン」と12月29日に放送された「中村獅童と日藝生」につ
いて、企画を担当された放送学科の茅原良平先生にお話を伺った。

茅原良平先生
(放送学科准教授)



ニッポン放送とのスペシャルコラボ特番を実施することになったきっかけを教えてください。

日藝とニッポン放送の間で2019年に「連携・協力に関する基本協定」が結ばれたのがはじまりでした。協定を結んだのがニッポン放送の開局65周年、日藝も2年後に100周年を迎えるというタイミングでした。

そして2020年の年末に、11月20日に開催予定だった日藝100周年記念式典の時期に合わせて、オールナイトニッポンの特番をやろうということになりました。

11月なら日芸祭があるし、最終日にあたる11月5日の金曜日は朝の「あなたとハッピー」を担当する春風亭一之輔さんに続いて、お昼時は放送作家の高田文夫さんの「ラジオビバリー昼ズ」と日藝ゆかりの方がリレーのように登場する。その夜に日藝の特番を組んだら「日藝デー」にもできますね、という話になり、日程や内容が固まっていきました。

キャスティングについて教えてください。

日藝では落語や歌舞伎といった伝統芸能も学問として扱っていて、実際その分野で活躍する人が多いですし、その他にも様々な分野で名だたる人たちがたくさん活躍しています。そうした方々に日藝の魅力を語ってもらいたいと考え、ニッポン放送と打ち合わせを重ねました。

夜10時台のオールナイトニッポンGOLDの枠と深夜1時のオールナイトニッポンの枠に合う人は誰がいるか、候補となる日藝ゆかりの人たちをリストアップしました。

キャスティングの検討にあたって、夜10時台に若者向けの番組をやっているラジオ局もあるけれど、オールナイトニッポンGOLDは中高年に向けて普段はやっているから、その世代をターゲットの中心に据えてパーソナリティを考えることになり、普段からメディアにもたくさん出られている立川志らくさんにお願いすることになりました。

志らくさんは演劇から文芸に転科していたり、落語研究会の先輩にあたる高田文夫さんの紹介で立川談志さんに弟子入りしていたり、今回中継リポーターとして出演された三遊亭白鳥さんが学生時代の同期だったりユニークな経歴のある方で、日藝の特番にもってこいでした。

逆に深夜1時台はオールナイトニッポンのレギュラーパーソナリティの顔ぶれからしてもリスナーの中心は一気に若者になります。そこで候補に挙がったのが、俳優の黒島結菜さんでした。黒島さ

んは学生時代に写真学科に在籍されていて、2021年に日藝賞を受賞し、日藝的にとても旬だったことに加えて、2022年放送のNHK朝の連続テレビ小説「ちむどん」のヒロインを務めるなど世の中からも注目を集めていること。あとは、オールナイトニッポンのパーソナリティを務める俳優は基本的に男性が多く、女優さんがやるのは珍しいとニッポン放送が面白がってくれたり、黒島さんがラジオで1人だけで話すこと自体が新鮮で、話題性も期待できるということもありました。

この企画には 日藝生も多く登場していますね。

志らくさんの番組で、白鳥さんをレポーターにして日藝の構内から生中継したんですが、日芸祭最終日の遅い時間にも関わらず有志の学生たちが参加してくれました。

それから、番組に協賛していただいたきらぼし銀行と日芸校友会のラジオCMや番組内で使われたジングルは放送学科、文芸学科、音楽学科の学生によるオリジナルのもので、学生が創作力を発揮して番組に深く関わってくれました。

また、黒島さんの番組では写真学科とデザイン学科の学生がリモート出演してくれて、学業や学生生活のことを話してくれました。

このように出演者だけでなく、学生たちが一緒になって番組を作ってくれたおかげで、日藝の魅力を存分にPRし、100周年記念にふさわしいにぎやかな番組にすることができました。



日藝100周年特別記念番組「中村獅童と日藝生」についてお聞かせください。

中村獅童さんは学生時代に演劇学科に在籍され、2016年に日藝賞を受賞された日藝と縁の深い方です。また、ちょうど年始に歌舞伎座「壽 初春大歌舞伎」への出演を控え、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」(脚本: 三谷幸喜)への出演、2月にコクーン歌舞伎「天日坊」(演出・美術: 串田和美、脚本: 宮藤官九郎)への出演と日藝にゆかりのある方々と一緒に幅広いフィールドで活動されていることにも注目し、今回出演をお願いしました。

放送学科の録音スタジオにいろんな学科の学生を集めて公開収録をしたんですが、とても話が弾んで、予定した時間を超える収録になりました。

獅童さんはそれぞれの学生の質問に対して、自分が経験してきたことや自分なりのアドバイスを真摯にしてくださって、そのやりとりに日藝の先輩後輩の関係の良さがとてもよく表れていました。そして、収録の中で演劇学科の原一平先生と対談するくだりがあり、師弟関係の強さを感じる場面を見られたことは大変貴重でした。

校友会は卒業生、現役生、教職員の関係性から成り立つ会ですが、この年末特番からはその三者のつながりを感じてもらえたのではないかと思います。



「日藝100周年×ニッポン放送スペシャルコラボ」を終えて

ラジオって不思議なもので、いろんなものとコラボできるんです。文芸小説でラジオを題材にしたものをここ数年でよく見るようになったし、映画でラジオが題材になったものもあるし、音楽でもラジオのことを歌っている歌はたくさんあります。

アートとラジオはとても結びつきやすいのかもしれませんが、日藝生のアートの感覚とニッポン放送というラジオメディアを掛け合わせた時に、まだまだ新しい創作物が生まれると思うんです。

「次にまた何かやりましょうよ!」と学生から創作意欲が湧き上がって、今度は学生主体でニッポン放送とプロジェクトに取り組めたら…。そんな進展が今後起きるといいですね。

最後に紙面をお借りして、今回の一連のコラボ特番に関わっていただいたみなさまにお礼申し上げます。ありがとうございました。



創設100周年を機に芸術学部では
次の100年に向けた新たなアクションとして

「日藝ならではの産官学連携プロジェクト」をスタート。

芸術総合学部だからこそできる課題発見と解決への取り組みは、
既存のカリキュラムにない自主創造教育実践の「場」を創出しています。

「日藝ならではの産官学連携プロジェクト」これまでの取り組み

【企業】

■ 株式会社ニッポン放送

「日藝100周年×ニッポン放送スペシャルコラボ」

- 特別番組「立川志らくのオールナイトニッポン GOLD 日藝創設100周年スペシャル」
- 特別番組「黒島結菜のオールナイトニッポン 日藝創設100周年スペシャル」
- 日藝100周年特別記念番組「中村獅童と日藝生」
- 番組内で流れる「きらぼし銀行」「日本大学芸術学部校友会」のCMと、CM明けのジングルを現役日藝生が制作。

■ 株式会社きらぼし銀行

- きらぼし銀行「前給」プロモーション
- 受託研究によるバンパー広告 企画・制作

■ 西武鉄道株式会社

- 江古田キャンパスプロジェクトへの参加
江古田駅への「駅ピアノ」の設置
学生がデザイン協力した江古田駅「駅デザイン」
日芸、武蔵野音大、武蔵野大学の3大学が連携した「江古田ポートレート企画」

【地方自治体】

■ 新潟県十日町市

- NAP (日藝アートプロジェクト事業)として、「大地の芸術祭」への参画

■ 石川県小松市

- 小松市立高校合同授業の実施

■ 千葉県富里市

- (スポーツ科学部・危機管理学部との共同包括連携)
- 魅力の発信と知名度向上を目的としたデザイン
デザイン学科と写真学科の学生による「富里市PRポスター」、商品券や「読書駅伝帯りレー」の企画・協力

■ 福井県勝山市、広島県安芸高田市 東京都練馬区、東京都板橋区 角川文化振興財団 等



オールナイト
ニッポン

日本大学芸術学部創立100周年記念 産官学連携プロジェクト

インタビュー

日本大学芸術学部庶務課
連携プロジェクトコーディネーター
田中しおりさん



元々は映画学科の助手をしていました。3年の任期を終え、2020年4月に新設された連携プロジェクト室に配属されました。その直後に新型コロナが直撃し、あまり大きな活動はできませんでしたが、2021年は「日藝100周年」ということで100周年記念事業として記念映像の撮影や、ニッポン放送で特別番組を制作するなど、やっと連携プロジェクトが動き始めました。その事務的な手続きや関係者との連絡などを担当しています。このプロジェクト自体まだ動き始めたばかりなので手探りの状態ではありますね。

産官学連携プロジェクトは学生さんの経験の場になることが一番なので、今まで行ってきた取り組みだけではなく、日藝生のクリエイティブな部分を出せる場として、いろんなことがもっと広がってほしいなと思っています。もし何かいいアイデアがあれば、学生さんでもぜひ教えてほしいです!

(取材・構成: 岡本、堀内、吉野)

演劇学科
尾崎弘征 教授



もっとぶっ飛んでいてほしい

尾崎先生：着任当初、日藝にはぶっ飛んでいる学生しかいないんだろうと思っていましたが、全然そんなことはありませんでした。みんな丸くて枠からはみ出ていない。でもいい意味で負けず嫌いと思地っ張りな学生が多い印象はありますね。そういうのは良い所だし、やっぱり必要なことでもあります。

要望としてはもっとぶっ飛んでいてほしい。私のゼミにははっちゃけた学生がいて、そういう学生が日藝の平均になっている方が面白いですよ。「手間はかかるけど、まあやらせておくか」と言える環境が一番いいんです。安全面にだけ目を配っておいて、あとは自由にやらせたい。学生にブレーキをかける役割が理想ですが、今はだいたいアクセルを踏む役割を担ってしまっています。学生にはもっと積極性を持って活動してほしいですね。

S1：尾崎先生は放っておいてくれるし、助けが必要になったときには手を貸してくれます。程よい距離感を保ってくれていて、いい意味であんまり優しくない。

尾崎先生：崖から突き落として、登っている最中に足のかけ方を教えている感じだね。

S2：基本的なことでも聞けばなんでも教えてくれるんです。自分がやりたいことを分かってくれているのは、本当にすごいと思う。素人でも同じ目線から見つめ合ってくれる先生はなかなかいませんよ。

ぶっ飛べ日藝生

初の音響専任教師

尾崎先生：音響専門会社に30歳過ぎまで勤めたあと、世田谷パブリックシアターで音響効果担当として定年まで働いていました。退職後は2年ほどフリーで音響効果の仕事をしていたのですが、奥山緑先生のお誘いで日藝にお世話になることになったんです。演劇学科で私がはじめての音響専任教員なんです。私の着任前は音響専任の教員が在籍してなくて、音響専攻もありませんでした。

授業では具体性を重視しています。テキストを使って理論を学んでも、いまいち分からないことが多いんです。だからテキストを開く前に、実際に機械に触れてもらう。そして音を聞いてもらいます。それから理論を学ぶと、「あの音はこういうことなのか」と学生が飲み込みやすくなる。

S1：いままでは毎回違う外部の先生に音響を教えてもらっていたのですが、なかなか思うようにこちらが知りたいことを習うことが難しかったです。でも尾崎先生はやりたいことをやらせてくれるし、そのプラスαも教えてくれる素敵な先生です。

S2：座学で勉強して「これを引っ張ったらできる」って言われても、経験しないとなかなか理解できないんです。だから今までは現場に出たもの勝ちでした。私はあまり現場に出ていなかったで「みんなはなんで知ってるの？」っていう状況が多かった。

尾崎先生：コロナ禍にあって、やっと機器に触れられた2年生が興奮したり感動している様子を見ると、父親みたいな気分になりますよ。

芸術教養課程
松浦恵美 専任講師



いろんなところに
ふれてみて

個人的に会いに行きたくなるくらい
素敵な先生

松浦先生：大学院の博士課程で論文を書きつつ、様々な大学で英語や英米文学の非常勤講師をしていました。日藝でも非常勤で長くお世話になっていて、3年前から専任講師として芸術教養科目で主に英語を教えています。授業は大変かなと思っていましたが、やってみるとすごくおもしろかったです。学生さんたちからいろいろな反応があったり、いろんな話を聞けたり、それから自分の知識を伝えられるという喜びもあり、大学教員というのはとてもいい職業だなと思うようになりました。

S1：松浦先生は学生の気持ちを考えて授業を組み立ててくれる先生です。英語が苦手な友達からも、先生の授業は楽しいという話をよく聞きます。授業に関係なく、個人的に会いに行きたくなるような、先生でもあり人生の先輩でもあります。